

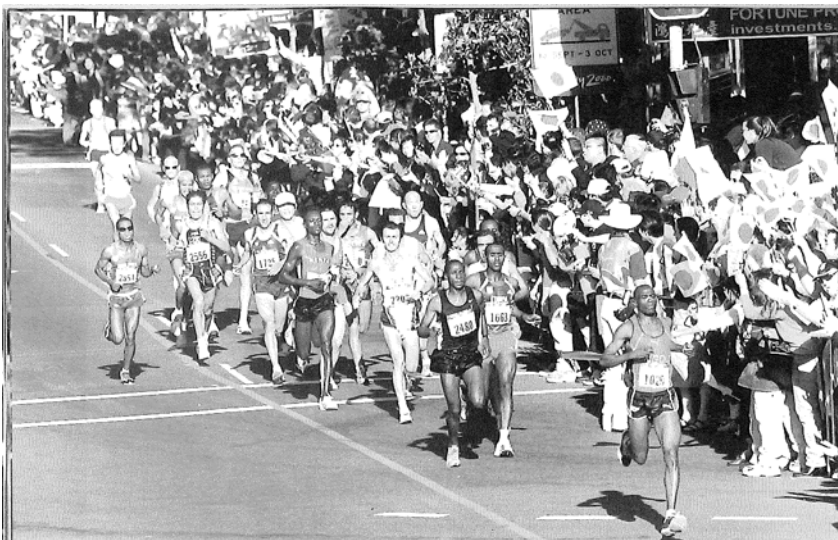
2000 年度

日本マラソン勢 惨敗 犬伏は途中棄権

シドニーオリンピック (オーストラリア: シドニー)

犬伏孝行

マラソン 途中棄権



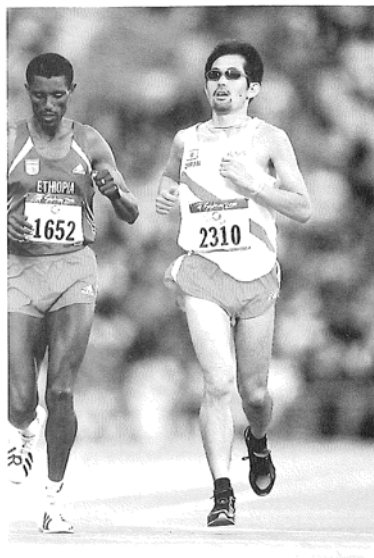
▲大会最終日の男子マラソンは強風下、有力選手が次々に脱落する意外な展開となった

日本男子マラソン勢、力を出し切れず 川嶋21位、佐藤41位、犬伏は途中棄権

日本選手団がシドニー入りしてから、これほどの強風は初めてだったという。前日から吹き始めた西の風が、男子マラソン当日のスタート時(午後4時)で7.7m。気温21度はまあ良しとして、湿度20%というカラカラ天気も悪条件となった。

参加した100人のランナーの中から、ポツリ、

▼日本トリオで最初に先頭集団から遅れをとった川嶋伸次(旭化成)が結果的には最高で21位(2時間17分21秒)



ポツリと先行する選手はいたが、有力選手を含んだ大集団は5kmを15分30~40秒台のスプリットタイムを刻んでシドニー市内のセントニアル公園内へ。ここが平坦だということと、樹木で風がさえぎられたせいか、11km過ぎからペースが上がって、10kmから15kmが14分53秒。このレースで唯一、14分台を記録した所だった。

佐藤信之(旭化成)と犬伏孝行(大塚製薬)は、もちろんここはきちんとついた。しかし、初めから大集団の後方にいた川嶋伸次(旭化成)は、前の方の変化に気づくのが遅れ、集団から離れた。

川嶋は集団の前の方にいてムダな消耗をす

▼佐藤信之(旭化成)は23km付近で給水を取っているスキに集団に離されたことが致命傷となり、27kmあたりから徐々に後退。特に終盤の落ち込みが激しく、2時間20分52秒で41位に終わる



るのを恐れ、「今年のびわ湖(マラソン)のイメージ」で後ろにつけたという。ただ、びわ湖の時と今回は、集団の規模が違った。しかも、ペースメーカーがいないオリンピックでは、展開がまったく読めない。川嶋は「集団があまりにも大きすぎて、前のペースアップがわからなかった」と言い、「気づいた時には前に行かれていた」と反省する。

しかし、問題は位置取りだけではなかったはずだ。最初の5kmで「まだ5kmなの」と思い、12kmあたりでは「普段の30kmぐらいの疲労感を覚えた」という。「そこが長くて」と川嶋。「レースを投げることはしませんでしたけど、1人、2人と拾って行って順位を1つでも上に持っていくことで精一杯でした」

川嶋は「自分がダメでも佐藤、犬伏が行ってくれるはず」と信じた。女子マラソンが金メダル。できれば男子も、その快挙に続きたかった。

ところが、頼みの2人も後半に入って遅れ始めた。佐藤は20kmあたりで身体が楽で「これなら30km以降で勝負できるなと思った」と話す。そう考えていた矢先、23km付近で給水を取りに行っているスキに先頭がペースを上げた。佐藤は「そこがすべてだった」と言う。

一生懸命その差をつめたが、27kmあたりのアンザック・ブリッジで後退。思い切り前傾し、上りと向かい風に挑んで、エチオピア勢が引張る先頭集団とは確実に差が開いていった。犬伏も前後して、このあたりで離れてしまった。

「佐藤、犬伏は入賞するだろうに、オレは力がないな」と思いながらも、徐々に順位を上げていった川嶋が「あれっ」と驚いたのが32km過ぎ。白いランニングシャツに赤いパンツの日本選手2人が目の前に見える。犬伏は蛇行しているようだ。「仲間を抜いていく時は複雑な心境だった」と川嶋は言う。

結局、トリオの中で1番にゴールしたのが、

▼犬伏孝行(大塚製薬)も27km付近でトップグループに遅れをとり、その後、脱水症状に陥って足取りはフラフラ。38kmでレースを棄権した

